ソーラーカー・シルクロード走行日記

岡　田　俊　治

本学を中心とした日中伊ソーラーカー・シルクロード走行共同研究が，2001年９月３日（月）敦煌をスタートし９月８日（土）烏魯木斉ゴールを目指して実施された。ソーラーカー走行実験の研究発表は監督の西側助教授を始めとする走行チームにお任せするとして，当方は，走行チームの後方支援と歓迎セレモニーや文化交流会の運営担当で，今回のプロジェクトに参加した。本稿は，そうした立場から，ソーラーカー・シルクロード走行の様子を日記として以下にまとめた。

2001年8月31日（金）

中国シルクロードへ向けての出発の日である。13：30名古屋空港集合。本学の第２陣の学生を乗せたマイクロバスは12：30頃到着。以後順に集まってきて，最後に学長が集合して全員となった。学生５（含留学生２）名，教員５名，岐阜医療短大２名，本部１名，新聞・報道・出版関係５名の総勢18名である。空港まで来ていただいた関係者に見送られて出国手続きに向かった。中国西北航空のWH292は15:30定刻に離陸した。途中機内で国境を越えたので「時差の関係で時計を1時間遅らせて下さい」とアナウンスがあった。約２時間後には上海（シャンハイ）空港に到着。空港内で入国手続きを行い，再度WH292に乗って西安（シーアン）まで向かう予定であったが，出発が30分程遅れた。この程度の遅れは当たり前の範囲のようである。国内線側から中国汽車工業総公司（以下総公司）の馬処長と昆山外国語培訓中心（以下昆山）の文校長が搭乗してきて合流した。これで総勢20名である。

20：00西安空港着の予定が20：30頃になった。20分程してからトランクやダンボール箱などを順次受け取り，その頃には西安のガイドの馮さんも来てくれて，空港の目の前にあるホテルに向かうはずが，通関のチェックを受けようとした所，20分経っても30分経っても通してもらえない。ガイドが一生懸命説明するものの，文化交流の記念品として持参したシャープペンシル5000本，歯ブラシ5000本，説明資料5000枚を入れたダンボール箱23個について，「持ち込む目的が明確でないため認められない」とのこと。結局ガイドでは手におえず，出口の違う国内線側から総公司の馬さんに来てもらった。馬さんが，ファイルにしてある数種類の書類を示しながら通関担当官とのやり取りが始まって７～８分，やっと二人が握手をして一件落着。馬さんの話では，事前に持込許可を取らなければならなかったことと，歯ブラシは衛生検査も受けなければならなかったとのこと。持込許可については，ソーラーカー・シルクロード走行は中国政府の許可を得ている計

画である，また歯ブラシの衛生検査は敦煌（トンコウ）に行ってから受けると説明して了解を得たとのこと。ホテル到着は22：00近くになっていた。

9月1日（土）

昨日は途中で日本円を中国元に換金するチャンスがなかった。着いたホテルのフロントでは，レートの表示は無く，たのめば歩の悪いレートで換金はしてくれる。それでもお客へのサービスだそうだ。そして今日は，土曜日のため都市部の銀行しか営業していない。そんな訳で，馬さん，文さん，脇学長と午前中西安市内の銀行まで出かけることになった。ホテルでタクシーを頼んでしばらくしたら，ロビーの前にタクシーが１台いるので外へ出てみた。よく見れば，ホテルのボーイとタクシーの運転手が何かやり合っている。流しのタクシーでホテルから呼んだものではないらしい。ボーイから何やらきつく言われてしぶしぶタクシーが去った後，次のタクシーがやって来た。ボーイが案内してくれたのでそのタクシーに乗って出かけた。ところが，ホテルを出て道路を走り始めてすぐに警察官に止められた。警察官と運転手のやり取りが始まった。われわれが乗ったタクシーは，西安市内の営業権は認められているがここでは営業できないらしい。運転手は，警察官としばらくやり取りしているうちに営業許可証を取り上げられてしまったようだが，なんだか訳の解らないうちにそのままタクシーを運転し，結局われわれは45分程で西安市までやってきた。西安は古い歴史のある街で，シルクロードの基点でもあると聞いていたが，古い建物などの一部は残っているものの近代化が進み，車の交通量も多く，街中が工場と車の排ガスによるスモッグに覆われていて，古都のイメージはあまり感じられない。

西安市内からホテルに戻って，昼食を済ませてから空港へ行く予定でみんなで食事をしていると，ホテルのボーイが留学生の張さんに耳打ちして，「夕べは夜遅い食事で今日の昼食とは違います」とわざわざ言ってきた。よく見れば，料理の種類はまったく同じなのに，夕べは1人35元（1元は15円弱），今日は25元なのだ。

昼食の途中で，自分で勝手に組んだオプショナル・ツアーの案内から帰ってきたガイドが，「荷物を先に空港へ持っていくから誰かついて来てほしい」というので，手荷物などをそのままにしてガイドに同行した。トランクやダンボール箱などが積まれたトラックの助手席に乗ると，ガイドに外から「ハイ，お願いします」と言われてトラックがスタートした。ボーイ３人と当方だけになってしまった。空港へ着くと，トランクなど14個は荷物専用の窓口へ運び込み，ダンボール箱23個は搭乗窓口近くへ運ばれた。ボーイがさかんに中国語で何か言うのだが，いかんせんチンプンカンプン。ただ一つ「money、money」という言葉が解るだけ。何らかの金を要求しているようだが，すでにだまされたり，だまされかけたりしているので疑心暗鬼になっていて，ボーイの言うことをまともに聞くことができない。そのままボーイについていくと，ダンボール箱を衛生検査のコーナーに運んで担当官に渡し，担当官は検査らしいことを何もしないで，“AIRPORT SAFETY CHECK”と書かれた帯状のビニール紐を専用の機械に乗せて掛けるだけ。そしてその

コーナーでは，1箱10元支払わなければならないという。そこでやっと解ったのだ。ダンボール箱23個で230元と思ったら，ダンボール箱を数え間違えたのか190元だった。

ビニール紐を掛けたダンボール箱を搭乗窓口へ運んで並んでいると，時間が迫ってきたので，ホテルに残した当方の手荷物も持って全員が空港へやってきた。先に運んだトランク等は14個，後から来たガイドは全部で19個あるはずという。全員が来たときには２個持ってきたので，先の14個と足して16個だから３個足りないと言い出し，ボーイとスッタモンダが始まった。互いにすごいケンマクだ。しばらくゴタゴタした後，ガイドがもう一度全員に荷物の数を確認したところ全部で16個とのこと。問題は解決したものの，これから先が思いやられる。

荷物の重量オーバー分3800元，空港利用税20名×50元を支払ったら，団体ヴィザを持っているかと聞かれた。そんなもの持っていないとガイドに答えたら，担当官からチケット及びパスポートの確認で良いといわれた。

ガイドの馮さんと別れてわれわれ全員が飛行機に搭乗したのは，離陸10分前になっていた。14：30飛行機は西安空港を定刻通り離陸した。飛行機が飛び立って１時間程過ぎたあたりから，地表の色が少しずつ褐色に変わり，やがて一面の砂漠となった。飛行機は定刻の19：00に砂漠の中の敦煌空港に着陸した。空港では，8月20日（月）に出発した第１陣の西側監督やイタリアから走行チームに参加しているフェラーリ工業専門学校のフィリッポ副監督，学園本部の山田理事，上海事務所の都築所長と郭さんの他，関係者が出迎えてくれた。これで総勢38名となった。今晩は敦煌市関係者との晩餐会が20：00から予定されている。このあと荷物を受け取り，それからホテルまで約20分。ホテル着と同時にチェックインし，顔も洗わずスーツに着替えて，会場にて晩餐会進行の調整を行った。

写真１　敦煌空港

日中伊ソーラーカー・シルクロード走行　敦煌晩餐会　国際大酒店　20：00

敦煌市来賓紹介				
走行団紹介				
走行団長挨拶		中日本自動車短期大学	学長	脇　俊隆
挨拶		中国汽車技術研究中心	主任	赵　航
走行チーム紹介	監督	中日本自動車短期大学	助教授	西側　通雄
	副監督	フェラーリ工業専門学校	教諭	フィリッポ・サーラ
乾杯		敦煌市	副市長	李　明

9月2日（日）

10：00から12：00までの間，各部門の担当責任者がホテルの会議室に集まり，計画実施にともなう諸々についての調整並びに確認のためのミーティングを行った。この間に時間がとれた人たちは，ホテルからレンタル自転車で15分程の砂漠に出かけ，ラクダの背中に乗ったり，敦煌市内の寺院の見学などをした。

13:30頃にはソーラーカーDream Challenge号（以下DC号）とスペアパーツなどを積んだトレーラーが天津（テンシン）から到着した。走行チームのメンバーが早速トレーラーからDC号を降ろし，明日の出発の準備をする。

写真２　Dream Challenge号出発準備

15：00頃には烏魯木斉（ウルムチ）から大型バス２台も到着した。VOLVOの45人乗り，トイレ付きで，日本のハイウエイバスのような仕様。このようなバスは，この辺りには敦煌から1000km以上離れた烏魯木斉に３台あるだけだそうだ。このバスに，天津で購入してトレーラーに積んで運んできた発電機，食料品，飲料水，寝袋などと，日本から持参した記念品などを積み込んだ。

陽の暮れる前に，明日の文化交流及びスタート会場となる敦煌市東街小学校へ下見に行ってみた。校庭の中央前部にはすでにステージが作られ，準備万端であった。

9月3日（月）

ソーラーカーDC号のシルクロードへのスタートの日である。天候晴れ。いよいよという時になって，バスのドライバーが「バス料金を事前に現金で支払ってほしい」と言い出し，総公司との契約は確約されていたはずなのに，学園本部，上海事務所，総公司，中国汽車技術研究中心（以下研究中心）の間でやり取りが続き，９:00近くになってやっとのことで，「後払い，但し現金で支払う」ということで決着した。信用取引が定着していない社会で高額取引を行う難しさを感じた。

写真３　スタート前のDream Challenge号

昼食用のパンと魔法瓶の積み込みを佐藤（幹）先生が確認し，10：00ホテル前でDC号を中心に隊列を組み，パトカーの先導で東街小学校に向かった。ここで走行団は，バス２台，パジェロ３台，トレーラー１台のドライバー計11名，NHK取材班９名を加えると総勢58名，これにパトカー

2台の警察官が加わることになった。

東街小学校に到着すると，小学生1500名の見事な演奏と踊りで迎えてくれた。

日中伊ソーラーカー・シルクロード走行スタート　敦煌東街小学校　文化交流会

走行団長挨拶	中日本自動車短期大学	学長	脇　俊隆
歓迎挨拶	敦煌市立東街小学校	校長	范　登輝
生徒代表挨拶			
ソーラーカー説明	中日本自動車短期大学	学生	石田　裕彦
		留学生	張　小春
記念品贈呈			
ソーラーカー走行デモンストレーション			

写真4　東街小学校文化交流

文化交流会の途中でステージの奥からドスンという音がしたので振り返ってみると，走行チームの堀田君がステージの後ろへ落ちてしまった。あわてて医療短大の高木先生に見てもらったところ，貧血で倒れたとのこと。すぐに回復した。様態が軽く済んで一安心。

11：00DC号は東街小学校でのデモンストレーションの後，校門を出てから200～300m過ぎまで子供たちに見送られながら，そのままシルクロードへのスタートを切った。

スタートして約20分，街中を少し出たポプラ並木の途中でDC号停車。充電不良の状態。すぐに走行チームが点検する。工具や部品を揃えるため，学生が隊列の前へ後へと走り回る。「ヒューズ切れか」という声が聞こえる。時間が少しずつ経過する。「トラッカー（DC-DCコンバータ：安定充電制御装置）の不良」「コンデンサが焼けてる」などの会話が聞こえてくる。「搬出時の木箱の熱処理が原因なのでは」といった声も聞こえてくる。西側監督はフィリッポ副監督に説明している。ともかく不良品をスペアパーツと交換して，およそ30分後に再スタートとなった。

13：10DC号停車。駆動チェーンの調整。その加工修正を行っている時間を利用して昼食をとることにする。周りは砂漠。気温はそれほど高いとは感じない。風が強い。ズボンの裾がひらひらとなる。風が強くても砂が飛んだりすることはない。この辺りの砂漠は黒っぽい砂利に覆われている。昼食はカップ焼きそば，パン，焼き鳥缶詰などである。路肩でカップ焼きそばをすすりながら周りを見れば，砂漠といっても背丈20～80cmの草がそこここに生えている。中には紫色の花が咲いているものもある。秋に満開になるそうだ。葉っぱをほんの少しちぎって見てみると，細

い茎にゴマ粒ぐらいの薄緑色の葉っぱがびっしりついており，水分をたっぷり含んでいた。

チェーンの修正作業は40分程で終了した。食事の後片付けなどをしなければならないわれわれのバス２号車を残して，DC号と走行隊はスタートした。後からスタートした２号車もすぐに追いついた。DC号はその後順調に走行している。砂漠は広い。とにかく広い。どこまでもまっすぐ伸びる道。前を見ても，後ろを見てもまっすぐである。その道をDC号はおよそ35km/hで走っている。この頃になるとアスファルトの表面は溶けて黒く光っている。遠くには竜巻が発生している。砂が巻き込まれるのが見えるからそんなに遠くではないのかもしれない。よく見れば，消滅しかけているのも含めて３つもあるではないか。この辺りでは竜巻の発生は毎日のことで，今日のは小さい方だそうだ。でもDC号に近づいてきたら危険だ。道路から数十メートル離れたところに，くずれかけた昔の“ノロシ台”があった。点々と北京まで続いているそうだ。

写真５　チェーン修正作業

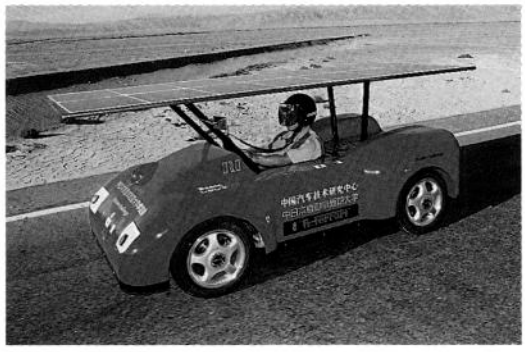

写真６　走行するDream Challenge号　※

15：00草木がほとんど生えていない砂漠地帯に入る。ここでバス２号車は，今夜の野営準備のため隊列を離れ，先に星星峡（シンシンシア）に向かうことにした。とたんにバスは猛スピードで走り出した。日本の一般国道にあたる２級公路を110km/hでとばしている。

17：00星星峡に到着。標高1890mの高地。しかし日差しは強く気温31℃。星星峡は自治区境に近く，哈密（ハミ）市の公安が小さな出張所を設けている。道路の両側におせじにも清潔とはいえない食堂やガソリンスタンドなどが十数軒あり，その真中あたりの北東側に，四方が建物に囲まれた小学校の校庭より少し狭いくらいの広場があった。バスはその広場の一番奥に駐車した。広場の入り口右側の２階建ての建物が公安の出張所，その他は平屋で，まだ半分くらいは建設中である。その建設中の一室を借りて宿泊することになった。当初の計画では，星星峡には宿泊施設が一軒もないので，テントを持参しキャンプを張る予定にしていたが，公安の責任者と事前調整したところ，治安上危険とのことでキャンプをやめて部屋を借りることにした。バスの中で寝ることも検討したが，それも公安から認められなかった。必ずしも危険ということではないと思うが，この辺りは，大変気の荒い少数民族カイ族の居住区でもあるそうだ。

われわれが借りた部屋は広さ40畳程で，奥に６畳の小部屋が２部屋付いている。小部屋は女性たちが使うことにした。他に出張所２階の会議室も借りてメディア関係の人たちが使うことにし

た。電気，ガス，水道なし。部屋の扉は錠まいがついており，その鍵を貸してくれたが錠まいは外からしか懸けられない。おまけに窓の鍵もなし。備品は丸い食卓が3台のみ。入ってはいけないといわれた隣の部屋には厨房設備があり，どうやら将来は職員食堂になる予定の部屋を借りたらしい。日没が20：00頃と聞き，それまでに夕食をすませなければならない。早速バスから発電機と電子レンジを降ろし，お湯を沸かすことから準備が始まった。がしかし，延長コードの差込口の形状が3パターンあり，2台持ってきた電子レンジは1台しか使えない。あれこれやっているうちに研究中心の王さんが，どこからかテーブルタップを買って来てくれた。おかげでもう1台の電子レジンも使うことができるようになった。カップラーメン，鮭缶，らっきょ，塩辛，インスタント味噌汁，昼の残りのパンなどがテーブルの上にところ狭しと並べられた。

20：20頃DC号はトレーラーに積んで運ばれてきた。その後再びトラブル発生で自走することができなくなったそうだ。強い登り勾配が断続的に続いたためのトラブルか。DC号の整備は明日行うことにして，全員で夕食をとることにした。すでに暗くなってしまい，持ってきた懐中電灯4個で灯りを採りながらの夕食となった。夜空にはたくさんの星がきらめき，しかも星が大きく見えるような気がした。そんな夜空を眺めながら飲む生ぬるいビールが，妙にうまいと感じた。

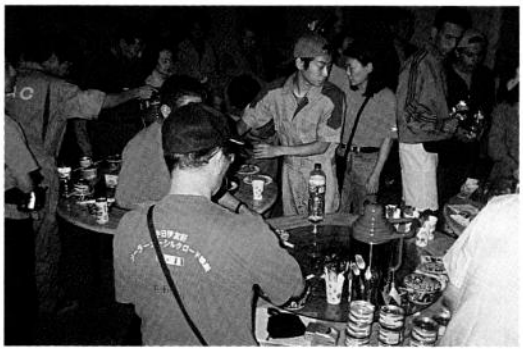

写真7　星星峡の夕食風景

腹ごしらえの済んだものから順に寝袋に包まって，コンクリートの床に雑魚寝する。寝袋に包まっていても，しばらくするとコンクリートの冷たさが背中や腰にじわじわと伝わってきた。治安の悪い地域なのに扉に鍵もかけられず，どっちみち安眠できる環境ではない。開き直って，できるだけ眠ることにした。

本日トラブル発生でもDC号106km走行。

9月4日（火）

6：00を少し回った頃起床。まだ真っ暗。ここの住民はそれぞれ発電機を持っている。公安の出張所はソーラー発電と風力発電を利用しているが，民家の中には，懐かしい焼玉エンジンの発電機を持っている家もある。暗いうちから「ポンポンポンポン」とやられてはたまったものじゃない。おまけに野犬の鳴き声も加わって，朝陽が昇る前に学生たちも起きだしてきた。7：00頃になって，山の間から太陽が顔を出してきた。陽が昇ると山の中に野犬が姿を消して，替わりにロバが3頭，のんびりと朝の散歩をしていた。今日も晴天。長袖の上着がないと寒くて耐えられない。乾燥と低温のせいかノドが少し痛い。医療短大の松下先生から薬をもらう。朝食は，昨晩の夕食とあまり変わらないメニューながら，味噌汁は“あさげ”にして，漬物を加えるなど，料

理長の桜山先生はそれなりの工夫をしていた。

走行チームのメンバーは食事もそこそこにDC号の整備にかかる。充電系統の不調に加えて，バッテリ容量の残量計も表示しなくなってしまった。充電系統は，最悪のことを考えて西側監督が自分のバッグに忍ばせてきたトラッカーと交換しても再び不調となり，スペアパーツが不足する中で再度整備しなければならなくなった。西側監督を中心にあれこれ検討し，直列だったソーラーパネルを２分割の並列にし，それまで10個使用していたバッテリを充電電圧に合った左右４個づつにして充電効率を確認し，それで結果がよければトラッカーを通さないで直接バッテリに充電するということが決められたようで，その整備作業に相当の時間を要した。作業の様子を覗いてみると，整備環境の整っていないところで，DC号の配線関係を作り直しているのである。配線を変更したため，ケーブルが５mm足りなくてバッテリターミナルに届かないなど，あれやこれやの問題をクリヤーして，12:00過ぎまでかかって整備が完了し，チェックの結果は良好。但し，若干の性能ダウンは避けられず，空が曇ったり，陽が傾いて日照が弱くなったときなどに支障が出るかもしれない。帰国してから西側監督に聞いたことだが，もしうまくいかなければDC号をトレーラーに積んで帰らなければならないかもしれないとの想いが頭をよぎったそうだ。

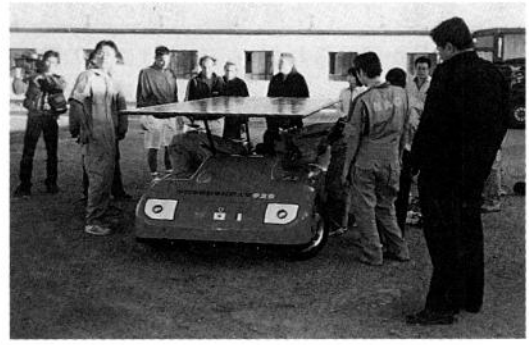

写真８　Dream Challenge号の整備

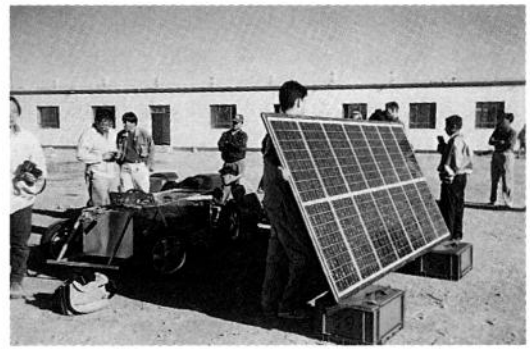

写真９　ソーラーパネルの充電チェック

走行チームがDC号の整備をしている間あちらこちら見ていると，DC号の見学に来ていた住民が，子供を連れて勝手にバスに乗り込んだ。子供にバスの見学をさせているようだが，バスにはいろいろな荷物が積んでありいささかヤバイ。早々にバスから降りてもらった。イタリアの学生がビデオカメラを回していて，たまたますぐ近くにいた軍隊の方に向いたとき，兵隊に大きな声で何か言われた。あわてて学生をわれわれのところへ引き戻して，事なきを得た。その辺に捨ててあるゴミは時間が経つと減っている。ペットボトルなどは重宝されるようだ。見学に来ているのか，ゴミ拾いに来ているのか区別がつかない。目を離すわけにはいかない。

山田理事や脇学長の先行隊に状況を知らせたくても，知らせることができない。携帯は繋がらない。新聞社の無線も届かない。総公司の馬さんに同行してもらって，公安の出張所で電話を借りたいと頼んでみても，担当者がいないから解からないと言われ，電話を貸してもらうことができない。そういえば昨日会って話をした責任者は，「先に哈密へ行って皆さんを迎える準備をしま

す」と言って，朝早く出かけてしまった。哈密に着いたとき姿は見なかったが…。馬さんと３回目に出張所を尋ねたとき，うるさく思ったのかやっと電話を貸してくれた。１分３元とのこと。日本語で「もー何でもいいから貸してくれ！」と言いながらダイヤルして，やっと都築所長に連絡がついた。

夕食，朝食とたいして変わらないメニューで昼食を済ませ，15：00までDC号の充電をして，とりあえずトレーラーに乗せて哈密市の手前30km付近まで運ぶことになった。この辺の土の表面は所々が塩とアルカリで覆われて白くなっている。18：15哈密手前30km地点に到着。トレーラーからDC号を降ろし，哈密に向けて自走を開始した。その辺りは砂漠の中に緑のブドウ畑が広がっていた。哈密市内では要所々の交差点で公安の交通整理がされ，道行く人々が「何だ，あれは！」と注目する中，19：20隊列を組んで哈密のホテルに到着した。

本日DC号25km走行。

日中伊ソーラーカー・シルクロード走行　哈密晩餐会　哈密賓館　20：30

哈密市来賓紹介				
走行団紹介				
走行団長挨拶		中日本自動車短期大学	学長	脇　俊隆
哈密地区代表挨拶		哈密地区行政公署	副専員	魏　天哲
挨拶		中国汽車工業総公司	処長	馬　西俊
走行チーム紹介	監督	中日本自動車短期大学	助教授	西側　通雄
	副監督	フェラーリ工業専門学校	教諭	フィリッポ・サーラ
乾杯				

日本語は相当達者な文先生が，哈密市の要人たちとの晩餐会では，中国語がきちんと伝わっているか心配とのこと。上海とはかなり違う中国語のようだ。

9月5日（水）

７：00起床。今日も晴天。ノドの痛みは解消した。マスクをして寝るようにした。昨晩洗濯してバスルームに吊るしておいた下着などは全部乾いていた。やたらと乾燥しているため爪の付け根の皮膚があちこち割れて痛い。唇も当然で，必需品として持ってきたリップクリームが役立っている。食事といえば中国料理かインスタント食品が続き，疲れもあってか走行チームの食欲減退気味。ホテルからE-mailで進捗状況を知らせるために持参したノートパソコンは，操作中に基本ソフトが起動できなくなり，使用不能となってしまった。電源用アダプタは，日本と電源電圧の異なる中国でも対応できるはずなので，電源の問題ではないだろうと思うが…。NHKでの放映の件で，太田課長補佐からのFAXを受け取った。２ページ分で30元ホテルから請求された。

ホテルを９：30に出発して，2回目の文化交流会場となる時代広場へ向かう。時代広場に到着すると，フランスの凱旋門を模して作った大きなゲートの奥にアドバルーンが２つ揚がり，熱烈歓迎の体制が整っていた。ここでもまた哈密市第５小学校の生徒1200名の演奏と踊りとハトの放鳥で迎えられた。

写真10　第５小学校文化交流

日中伊ソーラーカー・シルクロード走行　哈密第5小学校　文化交流会

走行団長挨拶	中日本自動車短期大学	学長	脇　俊隆
哈密地区代表挨拶	哈密地区行政公署	副専員	魏　天哲
生徒代表挨拶			
花束贈呈			
ソーラーカー説明	中日本自動車短期大学	学生	石田　裕彦
		留学生	張　小春
記念品贈呈			
ソーラーカー走行デモンストレーション			

走行団の数人は，子供たちの握手攻めにあい身動き取れない状態だった。

DC号は時代広場を3周してゲートに向かい，一般市民も含め，周りのものすごい人だかりに学生たちが心配する中，スタートした。市内を３km程走ったところで，トレーラーに積み込んで交通状況の安全なところまで運ぶ予定のはずが，トレーラーが見当たらない。哈密市内からシルクロードへ向かう道はいくつもあり，先行したトレーラーは，別の道で待っていたらしい。トレーラーのドライバーに携帯電話で連絡し，われわれの所へ来るまで待つことにした。トレーラーを待っているうちに，あちこちから人が集まってきて，10分も経つか経たないうちに40～50人集まってきた。ガードしている学生の間をかいくぐって，小さな子供をDC号の前に立たせて記念写真を撮る父親がいるかとおもえば，お盆に饅頭を10個ほどのせて売り歩いているオヤジがいるではないか。商魂たくましいところを見せられた。

トレーラーが来るまでに30分近くかかった。12：00DC号を乗せたトレーラーは80kmほど先の地点を目標に出発した。途中の砂漠では，ところどころで数頭の野生のラクダの群れがのんびりと草を食んでいた。他にも，ヤギ，羊，牛，馬，ロバ，名前のわからない鳥など，だだっ広いサファリパークへ来たみたいだ。この頃から空が少し曇ってきた。13：00ドライブインに停車した。

ここでDC号をトレーラーから降ろして充電し，自走させる。この時間を利用して昼食をとる。食堂の椅子と机だけを借りようと警察官が話したところ言葉が通じない。ウイグル語だそうだ。中国語の標準語を使えば何とか通じる。そういえば店の看板には標準語ではない中国語とウイグル語が書かれている。張さんに聞いても看板の字は「ヨクワカラナイ？」そうだ。

たらこスパゲティ，パン，さばの味噌煮缶で昼食を済ませ，14：00DC号はドライブインをスタートした。天候は相変わらず曇り。平坦路は30km/hぐらいで走行していても，登りでは20km/h程になる。それでもDC号は順調に走っている。16：20約30km走行したところに1軒の怪しげな食堂があった。時間的にこれ以上進むことは難しいので，丁度トレーラーを止めることができるここまでとし，DC号をトレーラーに積み込んでもう一度哈密へ戻ることにした。食堂の名前は清真飯店。回教徒が利用できるように，豚肉を扱っていないという意味だそうだ。合わせて宿泊もできるとのこと。戻りの道は，左は頂上付近に雪をかぶった天山山脈，右は地平線が丸く見えた。哈密のホテルへは18：15に帰り着いた。

本日DC号38km走行。

9月6日（木）

7：00起床。天気はドン天。前日微熱のあったチーム・リーダーの佐々木君が昨晩熱を出し，医療短大の先生方にお世話になる。投薬のほかに，夜中に大量に汗をかき2回下着やシーツの交換をしていただいた。しかし若さと責任感からか，朝には万全とはいかないまでもかなり元気になっていた。他にも下痢が4～5人発生。二人の先生に面倒をみてもらっている。走行団全体も疲れのピークの様子。

今日はとりあえずDC号を昨日Uターンしたところまでトレーラーで運ぶ。ホテルを9：00に出発。天候の回復を祈るのみ。70km程走ったところで突然晴天となる。一安心。11：00昨日の食堂の広場に到着。本当は広場でなく駐車場なのかもしれない。ここでDC号を降ろし自走させる。この間に食堂を借りて昼食をとる。食堂は男一人，姉妹と思しき女二人で経営していて，とても人なつっこい人たちだった。たぶんウイグル族だと思う。怪しげな食堂と言ったことゴメンナサイ。食堂の横にトイレがあったので行ってみた。ドロにワラを混ぜて天火で固めただけのレンガを，高さ1m程積んで囲んだ粗末な作り。真中に大きな穴がほってあり，その上に2枚の板を乗せただけ。天井はもちろん扉もなければ中の仕切りもない。男女共用である。乾燥しているため小便が溜まることもなく，汚物は硬く固まっていた。

昼食の準備をしようとした時に突然の爆発音。同時に40～50m離れたところで砂煙が立ち上がった。すぐ近くで軍隊が演習をしていたらしい。軍隊にカメラを向けないよう走行団に再度注意を促す。昼食はいつものメニューに，NHK取材班が差し入れてくれたハミ瓜1個。ハミ瓜は1個4元。大きさと形は丁度ラグビーボールのようで，表皮は黄色のマクワ瓜と緑色のキュウリを合わせたような色をしている。果肉は夕張メロンのような橙色で，味はあっさりした甘味である。

料理長が手際よくカットした一人一切れが美味しかった。

DC号は12：10スタートした。13：15料金所建設中のため通行止めとなっているところまで来た。迂回路は大変なガタガタ道。警察官が交渉して道路の舗装が完了しているゲートを通してもらうことができた。DC号はその後も順調に走行し，途中３ヶ所の登り勾配も走破した。15：00赤山口という所で停車しドライバー交代。16：20県境に到着。哈密の警察の管轄はここまで。DC号は明日に備えてここで１時間程充電する。ここからでは通信ができないので，バス２号車は先に吐魯番（トルファン）に向かう。２号車は125km/hまで表示できるスピードメーターを振り切って走っている。途中で吐魯番のパトカー２台とすれ違う。これまたすごいスピード。DC号を迎えるために走っていったものと思う。

今までは表面が砂利に覆われた砂漠だったのが，吐魯番に近づくにつれて風紋が美しい砂の砂漠が一部に見られるようになってきた。西遊記で有名な火焔山（カエンザン）の前でバスを止めて降りてみた。海抜－45mの地。ものすごく暑い。気温39℃。時刻は19：00。観測史上の最高気温は58℃だそうだ。その名のごとく，日没前の夕陽が火焔山を赤く染めていた。火焔山のすぐ近くに小さな清流が流れていた。９月３日に敦煌をスタートしてから始めて見た川である。

写真11　炎天下のDream Challenge号　※

やがてバス１号車の佐藤（健）課長補佐より，充電を終えたDC号はトレーラーに積んで予定通り18：00に出発したと連絡が入った。２号車は19：30吐魯番のホテルに着いた。トレーラーが到着したのは20：50だった。

本日DC号102.1km走行。大変順調。

9月7日（金）

７：00起床。天候晴。気温27℃。吐魯番市は平均海抜24m。昨年は２回雨が降ったそうだ。DC号はトレーラーに積んで，とりあえず昨日走行を終えた地点近くまで引き返す。途中バスに燃料を入れるためガソリンスタンドに立ち寄った。軽油１ℓ当たり2.6元。燃料を入れている間にリヤカーを引いたブドウ売りのじいさんがやってきた。１kgで２元。張さんが一房購入した。ミネラルウォーターで洗って食べてみた。日本では見られない種類だが，見た目は小粒のマスカット。透明の薄皮がむける。甘味と酸味がほどよく調和してけっこう美味しい。

写真12　ブドウ売り

吐魯番近郊では石油，石炭，天然ガスが採掘されており，天

山山脈には鉱物資源が豊富に産出する。農産物はブドウを始めリンゴ，アンズ，ザクロ，洋ナシ，トウモロコシ，スイカ，ウリ，トマト，名前のわからない葉菜類などこれまた豊富。特にブドウは新彊（シンキョウ）ウイグル自治区の代表的な産物で，ブドウ畑と四方の壁をレンガで格子状にしたブドウの乾燥小屋がイヤというほど広がっている。

12：10昨日走行を終えた地点より10km程吐魯番よりの地点に到着。トレーラーがUターンできる広場があったので，ここを本日のスタート地点とする。路肩にDC号を降ろして昼食をとっていると，たまーに通る乗用車が止まったかと思えば観光バスまで止まって，手にゃカメラを持って降りてきて，ソーラーカー見学会が始まった。

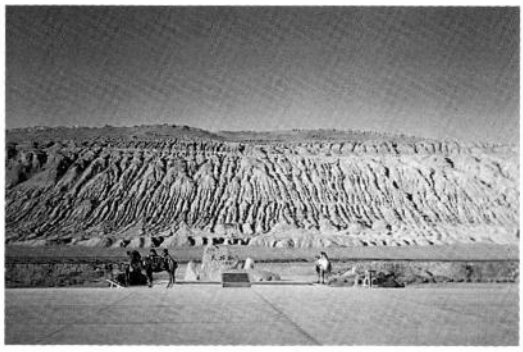

写真13　火焔山

いつもの昼食を炎天下の広場でそそくさと済ませ，13：00吐魯番に向けてDC号走行開始。気温31℃。風は相変わらず吹いてはいるが，それほど強くない。時間が経過するに従って気温は上昇し，14：00気温33℃。16：00ドライバー交代。気温36℃。19：00火焔山前に到着。気温38℃。風はほとんどない。ドライバーは大変だ。約150km走行したところで日照が傾いたので終了とする。19：50DC号をトレーラーに積んで吐魯番のホテルに到着。

DC号154.6km走行。本日も大変順調。

9月8日（土）

7：00起床。天気はドン天。気温26℃。9：00DC号をトレーラーに積んだままスタート。スタートして15分程過ぎたころバスのフロントウィンドウに雨粒がポツポツ。しかし数分で雨はやんだ。これは貴重な経験かもしれないがDC号には厳しい条件である。9：50頃雲が切れて陽が差してきた。西側監督がトイレットペーパーで作った“てるてる坊主”が効いたのか？このまま晴れることを期待する。吐魯番を出て50km程走ったところで高速道路のゲートに着いた。高速道路に入ってすぐの小草湖パーキングエリアで高速道路警察隊にバトンタッチのはずが来ていない。あちらこちら連絡しながら，このままでは充電時間が少なくなってしまうので行ける所まで走ってみようという意見も出たところにパトカーがやってきた。出発までに約30分のロスをした。

小草湖パーキングエリアを出てから間もなく，高速道路沿い右側に，清流とまではいかないが川が流れていた。川幅40～50m，川底に幅５m程の，所によっては強い流れがある。小草湖にそそいでいるようだ。20km程走ったところで突然草原地帯となった。世界第3番目の新彊大草原である。ラクダ，ヤギ，牛，羊があちこちに放牧されている。11：50高速道路左側に白い塩湖が見えてきた。塩湖パーキングエリアで停車しDC号を降ろして充電する。この間を利用して昼食をとる。最後の昼食なので，残っていたカップラーメンみそ味，しょうゆ味，焼きそば，たらこスパ

ゲティ，鳥めし，さけ缶，さば缶，インスタント味噌汁，らっきょ，塩辛，漬物などなど豪華？に並べられた。ポットのお湯だけでは足りないのでここでも発電機を使う。ガイドがパーキングエリアの売店でゆでたとうもろこしを買ってきておごってくれた。日本のものに比べてさほど甘くはないが，ガイドの気持ちが嬉しい。彼らとは始めのうちはギクシャクしていたものの，やがて赤いそろいのTシャツを着て，言葉は通じなくてもお互いに会釈を交わし，何かすごいプロジェクトに参加しているのだという一体感が生まれていた。隊列を組んで走っているとき，横から割り込もうとする一般車には，バスが入り込むのを邪魔してDC号を守ろうとしたりした。

写真14　新彊大草原と天山山脈

DC号は２時間ほど充電し14：00烏魯木斉に向けて自走を開始した。パーキングエリアを出てすぐの所に製塩工場があった。韓国にも輸出しているそうだ。DC号は右遠方に山頂が雲に隠れたボゴダ山（標高5445m）を望みながら，高速道路を平均速度30km/h程で順調に走行。15：15道路の両側に数百機の巨大な風車が現れた。年中一定以上の風が吹くので大規模に風力発電を行っている。誠に壮大である。風車の柱には新彊風力電能公司600kWと書かれていた。16：00気温32℃。風はさほど強くない。DC号順調に走行。周りには池や湖も見られ，緑が多くなってきた。16：15料金所に到着。パトカーは烏魯木斉の警察にバトンタッチ。ここでドライバー交代。ゴールまであと45km程である。16：30遠くに烏魯木斉市のビル郡が見えてきた。16：45街中に入ってきた。片側３車線の道路を車が埋めつくし横から隊列に割り込んでくるものがいたりして危険な状態。それでもDC号は順調に走っている。ゴール予定の18：30よりかなり早く17：15烏魯木斉市人民会堂に到着した。とりあえず隊列は道路をはさんで反対側の駐車場に入り，その後DC号が人民会堂へ入場することになった。18：00いよいよDC号がゴールの人民会堂へ入場となる。交通量の多い道路を警察官が通行止めにする中，DC号は音楽隊のマーチにのって，拍手とクラッカーに迎えられながらゴール会場へ入場し，会堂前のスロープを正面ステージまで進んだ。千人を超える小学生や一般市民が迎えてくれた。有馬理事，篠田理事，丹地学友会長等の学園関係者と顔を合わせたときは，いつのまにか熱いものがこみ上げてきた。学生たちも感激と興奮に湧いていた。関係各位の紹介，挨拶，花束贈呈，記念品贈呈，そして最後に学生たちがシャンパンを開けて互いの健闘を祝して，約40分でゴールセレモニーが終了した。

写真15　Dream Challenge号ゴール　※

その後ホテルまでパトカーの先導で市内パレードを行った。

本日DC号85km走行。最終日も順調。DC号の延べ走行距離は約510km。これは東京～大阪間に匹敵する距離である。前半のトラブルとさまざまな条件を考慮したとき，高いレベルの結果を出すことができたと思う。

日中伊ソーラーカー・シルクロード走行　烏魯木斉晩餐会　美麗華大酒店　20：30

新疆ウイグル自治区代表挨拶		政府経済合作事務室	副主任	郭　晩東
走行団長挨拶		中日本自動車短期大学	学長	脇　俊隆
挨拶		中国汽車工業総公司	副総経理	葉　淼章
挨拶		フェラーリ工業専門学校	校長代理	エミリア・パデルノ
走行チーム紹介	監督	中日本自動車短期大学	助教授	西側　通雄
	副監督	フェラーリ工業専門学校	教諭	フィリッポ・サーラ
乾杯		神野学園	理事	有馬　泉
中日伊記念品交換				

最初の政府経済合作事務室の郭副主任が挨拶されている途中で突然停電。郭副主任は生の声で挨拶を続けられた。日本であればこうしたことはたいてい数分で回復するが，そうはいかない。ホテルの人たちはさほど慌てるふしもなく働いている。次に学長の挨拶となり，このまま続けさていただきますと断った上で，学長は通訳をしてくれる昆山の文先生と一緒に非常灯の下で挨拶した。学長の挨拶の途中でやっと照明がついた。ところが今度は，当方の司会と通訳が使っていたマイクが入らない。これも回復するまでしばらくかかった。ゴールを祝うレセプションは時間が経つとともににぎわい，いろいろな苦難を乗り越えてゴールすることができた喜びで盛り上がり，終了間際にはステージで胴上げが始まった。西側監督につづいてフィリッポ副監督，そして最後に脇団長が宙に舞った。あらためて当方も学長と握手をした。

走行チームのメンバーではないわれわれにも，本学の学生とイタリアの学生がそろってテーブルまでやって来て「ありがとうございました」と言われた時は，何ともいえない嬉しさに満たされた。涙をぼろぼろ流している学生もいたりして，そんな姿を見ていると，とにかくやってよかった，ここまで来てよかった。

写真16　走行チーム

9月9日（日）

7：30起床。天候曇り。9：50最後の文化交流のため，烏魯木斉師範大学付属小学校へ向かう。ここでも小学生，中学生1200名の楽器の演奏と民族衣装での踊りで大歓迎を受ける。到着早々，山田理事と都築所長に郭さんを交えて，先方の担当者と文化交流会の段取りについて調整していたら，いつの間にかステージに小学校側の司会者が立っているではないか。副校長の薛天縛先生である。学長以下われわれは段取りが未調整のまま，流れに任せて文化交流会を進めてもらうことにした。

日中伊ソーラーカー・シルクロード走行ゴール　烏魯木斉師範大学付属小学校　文化交流会

走行団長挨拶	中日本自動車短期大学	学長	脇　俊隆
新疆ウイグル自治区代表挨拶	政府経済合作事務室	副処長	王　文明
師範大学付属小・中学校挨拶		小・中学校長	
生徒代表挨拶			
花束贈呈			
ソーラーカー説明	中日本自動車短期大学	学生	石田　裕彦
		留学生	張　小春
サイン会			
記念品贈呈			
ソーラーカー走行デモンストレーション			

写真17　師範大学付属小学校文化交流

文化交流会が終わった後ノートを持った子供たちからサインを求められ，今までは時々冗談でやってみたことはあっても，本当に求められたのは初めてなので，何の工夫もしないで名前だけを書いてしまった。言葉は通じないけれど，日本の子供たち以上に人なつっこい子供たちだった。今日のために覚えたのか子供たちから「サヨナラ，サヨナラ」といわれて学校を後にした。

DC号はデモンストレーション終了後パトカーに先導されてホテルの駐車場まで戻り，トレーラーに積み込まれた。

午後は走行チームを中心に都合のつくメンバーで天山天池の観光をした。高速道路を利用して烏魯木斉市内から1時間20分程で入場ゲートに着いた。通常は駐車場でバスを降りて小さな危なっかしいゴンドラに乗らなければならないが，ガイドが警備員に政府の許可を得たプロジェクトで来ていると説明したら，そのまま上って良いと言われ，日光いろは坂のような道路を上の駐

車場までバスで上った。そこから湖まで１km程は電気自動車で移動した。ドン天下の観光となり，海抜2073mのサイリム湖につくころには寒さで震え，遊覧船での観光もそこそこに引き上げた。地元の人の話では，明晩あたりは雪が降るかもしれないとのこと。この地方では，夏から冬，冬から夏に季節が変わるのに２～３週間で変わってしまうので，秋とか春がない。あってもほんの１週間程度だそうだ。途中，牧畜民カザフ族が生活しているパオという羊の皮のフェルトで作られた，丸い大きなテントをいくつか見た。

9月10日（月）

天候曇り。７：00帰国の第一陣がホテルを出発。当方は，NHK取材班のトラブルのため，ホテルの部屋で10：00まで待機していなければならないことになり，見送りに行くことができなかった。空港まで見送りに行った学長からは，思うように言葉の通じない３人のイタリアの学生たちと本学の学生たちが，いつまでも々別れられない様子を見て，両校の学生たちの深い交流にもなったと痛感した事を聞いた。すばらしい教育実践だと思う。

10：00を過ぎてから，学長以下５人で烏魯木斉博物館に行った。丁度ウイグル地区のあちこちで発見されたミイラを数体展示していた。学長はローランの美女に会えたことが大変な喜びであったようだ。次に紅山公園に行き，塔に登ってみた。このころやや本格的な雨に降られた。公園から少し歩いてレストランで昼食をとり，ホテルへ戻った。夕食前にホテルの近くにある百貨店など数軒を覗いてみた。日本の百貨店と違って，その規模は小さく，ある百貨店はほとんどの店が衣料品店であったり，別の百貨店は革製品の店ばかり集まっていたりという具合である。百貨店とはいわないかもしれない。マクドナルドを真似たコーヒーショップで１杯５元のコーヒーを飲んでいたら，文先生が，店に置いてある新聞にDC号の記事が載っているのに気づき，われわれに教えてくれた。店員にこの新聞が欲しいと言ったら，あっさりくれたのでもらってきた。

写真18　地元紙の記事（新疆都市報）

9月11日（火）

５：30起床。烏魯木斉から帰路に着く。７：00にホテルを出て烏魯木斉空港に向かう。空港は結構混雑していた。烏魯木斉空港８：20発の上海行きに搭乗，上海空港まで４時間余りである。空港を飛び立ってすぐ，飛行機の右側に雲上に姿を現した雪銀のボゴダ山を見ることができた。

14：00頃上海のホテルに到着し，日本料理店で食事をすることにした。12日ぶりの日本料理である。海外出張は何度ヶ目になるが，今回ほど日本料理，といってもにぎりめし，お茶漬け，納

豆，漬物，味噌汁といった日本料理が食べたいと思ったことはない。

夜になって22：00を過ぎた頃，ホテルのロビーで日本の商社マンと思しき数人のグループが，「戦争が始まった」と言いながら足早に去るのを見て，…？部屋でテレビを見てビックリした。アメリカの世界貿易センタービルが，旅客機を利用したテロリストの攻撃によって爆破されているではないか！それも２度も３度も攻撃を受けている。大変なことが起きたのだ。しかしわれわれとしては，明日の空港のチェック状況も気がかりである。

9月12日（水）

７：00起床。ホテルで昆山の文校長と別れて上海空港へ向かう。11：30発名古屋行きWH291の搭乗手続きを行う。人が多いだけに搭乗手続きが済むまでに結構時間はかかったが，特別チェックが厳しいわけでもなく，昨晩の事件の影響は全く感じられなかった。飛行機は予定時刻から30分程遅れて離陸した。途中機内で「時差の関係で時計を1時間進めて下さい」というアナウンスがあった。やがて飛行機は15：00少し前に名古屋空港へ着陸した。名古屋空港では荷物の中身を確認される人がいつもより多く，昨日の事件の影響が出ているようだった。われわれはソーラーカーでシルクロードを走ってきたと言えば問題なく通してくれた。スーツケースの他に背中と両手に荷物を抱えて出口に向かうと，伊藤事務局長代理や前日帰国した西側先生が出迎えに来てくれていた。ソーラーカー・シルクロード走行のプロジェクトがとりあえず終了した。今夜はぐっすり眠りたい。

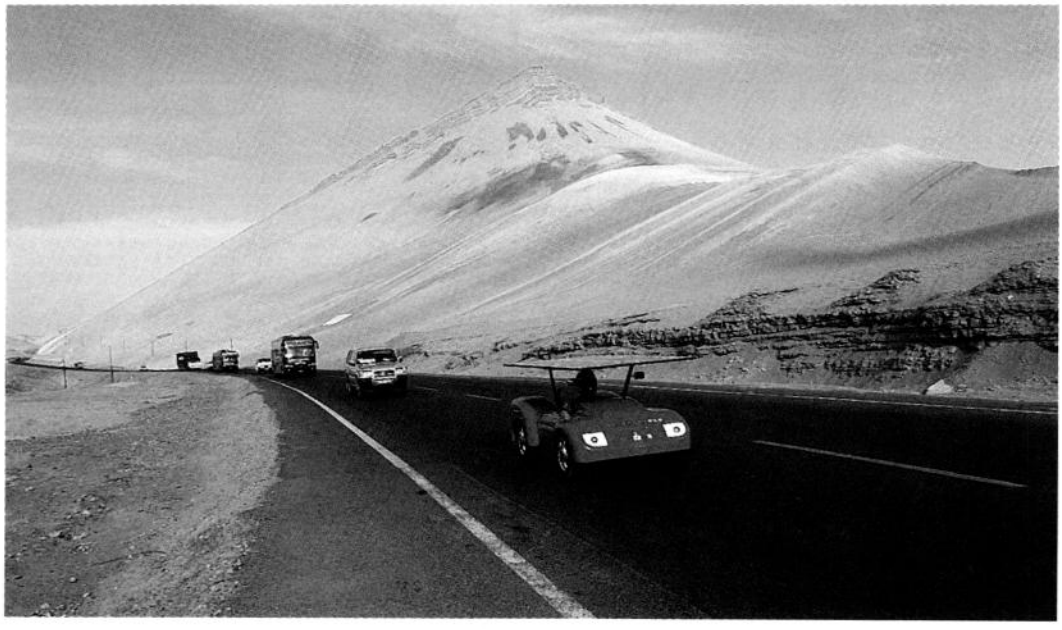

写真19　シルクロードを快調に走行するDream Challenge号　※

む　す　び

ソーラーカー Dream Challenge号のシルクロード走行には，連日いろいろなことがあった。当方が把握していないことも他に多くあったと思う。トラブルや諸々の事情により当初の計画のように進めることができなくても，とにもかくにも走行団全員が無事で，そしてDC号がゴールできたことが最大の喜びである。世界的に環境問題が論議されている今日，日本，中国，イタリア三国協同のプロジェクトとして，シルクロードを学生の手作りのソーラーカーで走る実験は，史上初めてのこと。21世紀の初頭に，まさに快挙である。実用車を目指した今回の実験はその実現に一歩も二歩も近づいたと思う。今後は，今回の成果を継続的に教育に反映させると同時に，新たに始まった交流を発展させなければならないと考えている。

団長の脇学長以下苦楽をともにした団員一同，前半トラブルが続いたDC号を，限られた環境の中で整備した西側監督を中心にした走行チームの学生と教員，全体をまとめるために，現地との種々困難な調整を担当した山田理事を中心にした学園本部企画調整室並びに上海事務所の方々，そして留守部隊として支えてくれた本学の学生と教職員のみなさん，本当にご苦労様でした。

今回のようなプロジェクトは，経験したいと思っても簡単にできることではない。われわれにとって誠に貴重な機会を与えていただいた。神野学園，中日本自動車短期大学，中国汽車工業総公司，中国汽車技術研究中心，フェラーリ工業専門学校の関係各位，そしてシルクロード各都市の関係各位に深く感謝いたします。

※ 写真提供：中日新聞社（カメラマン　柳田　大慈）

日中伊協同ソーラーカー・シルクロード走行団

イタリアチーム
国立フェラーリ工業専門学校

副監督	教諭	Filippo Sala
	学生	Raffaele Manna
	学生	Luca Belloni
	学生	Cristian Roi
	通訳	杉浦　紀子

出版
人間社　高橋　正義
　　荻野　直之

報道
中日新聞社　阿部　和久
　　柳田　大慈
TV局　宮崎　敬士
　　竹田　晋也
　　溝辺　義人

日本チーム
中日本自動車短期大学

団長	学長	脇　俊隆
副団長	神野学園理事	山田弘幸
監督	助教授	西側通雄
副監督	講師	清水啓司
庶務統括	事務局長	岡田俊治
	助教授	桜山一倉
	講師	佐藤幹夫
	講師	横井隆治
現地調整	神野学園上海事務所長	都築朝夫
報道	神野学園企画調整室課長補佐	佐藤健司
ドライバー	専攻科修了生	佐々木佳久
	学生	古田直規
	学生	篠原正也
データ処理	学生	石田裕彦
メンテナンス	学生	堀田耕平
	学生	西郷迪宏
	学生	加文雄三
サポート	学生	近藤俊也
	学生	島田智仁
	学生	福井俊洋
通訳	学生	張　小春
	学生	Tai Ee Wei
通訳	昆山外国語培訓中心校長	文　渝
	神野学園上海事務所	郭　建
岐阜医療技術短期大学		高木繁子
		松下延子

中国チーム
中国汽車工業総公司
馬　西俊
中国汽車技術研究中心
王　庆武
李　荣輝

図1　ソーラーカー・シルクロード走行団